

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：37130

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K15414

研究課題名(和文)慢性痛の脳画像によるクラスタリングの開発：Alexithymia vs神経症

研究課題名(英文)Development of Clustering of Neuroimage in Chronic Pain; Alexithymia vs. Neurosis

研究代表者

小牧 元 (Komaki, Gen)

福岡国際医療福祉大学・医療学部・教授

研究者番号：70225564

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：心身症の適切な病態理解や治療ではアレキシサイミア(Alex)パーソナリティの正しい評価を要する。従来の自記式Alex質問紙法TAS-20では神経症との識別が難しいことから我々は改訂版Alex構造化面接法(m-SIBIQ)を開発し、その信頼性、妥当性を検討した。その結果本法は内的一貫性も高く、神経症とも鑑別でき、その妥当性も証明された。

予備的研究として少人数の慢性疼痛患者群のVBMによる脳形態解析をおこなった結果、TAS-20第3因子と右小脳容積と正の相関が検出された。今後は、慢性疼痛患者の適切な病態把握に向けて、本Alex構造化面接法を用いた脳画像解析による検証を進めていく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Alexithymia(Alex)は心身症患者に特徴的な「感情への気づき・表出の困難さ」を指しており、心理療法的介入を困難にさせるパーソナリティの特徴の一つとして注目されてきた。一方、慢性疼痛を初め同症患者においてしばしば認められる「陰性感情への敏感さ」(=神経症)傾向はAlexと対極をなすパーソナリティでありながら、従来汎用されてきた自記式Alex評価法では鑑別が困難であった。本研究により我々が開発したAlex構造化面接法の信頼性・妥当性が証明され、神経症傾向との鑑別を含め、Alexの正しい評価法の開発ができたことは、今後、難治化しやすい心身症の実施臨床において大変有意義なことと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Appropriate assessment of alexithymia personality is required for proper understanding and treatment of psychosomatic disorders. Since the conventional self-reported questionnaire such as Toronto Alexithymia Scale-20 (TAS-20) has been difficult to distinguish from "neurotic" personality, we developed a structured interview for alexithymia, the 10-item version of the modified Beth Israel Hospital Psychosomatic Questionnaire (m-SIBIQ) and examined its reliability and validity. As a result, this method has a high internal consistency, can be distinguished from neurotic personality, and its validity has been proved. As a preliminary study, a small number of patients with fibromyalgia was examined by MRI study using VBM brain morphology analysis. We found a positive correlation with External Oriented Thinking Style of TAS-20 score and the right cerebellar volume. We are planning to proceed with verification by brain image analysis using the m-SIBIQ for patients with chronic pain.

研究分野：心身医学

キーワード：アレキシサイミア 失感情症 神経症 慢性痛 線維筋痛症 TAS 構造化面接 心身症

1. 研究開始当初の背景

(1) Alexithymia(Alex)は心身症患者に特徴的な「感情への気づき・表出の困難さ」を指しており、心理療法的介入を困難にさせるパーソナリティの特徴の一つとして注目されてきた。特に慢性痛などにおいては、その病態形成に Alex や神経症傾向などのパーソナリティ特性、あるいは不安・抑うつ、破局的思考など心理的諸因子が密接に関連していると報告されてきた(Lumley, Smith, & Longo, 2002; Tunks, Crook, & Weir, 2008; Makino et al., 2013)。しかしながら、パーソナリティの一つの特徴である Alex は 上述した様に“感情の気づきの欠如”を示し、他方、神経症傾向は反対に“陰性感情への感受性”を示すものであり、心理的特徴が異なることから臨床上の対応の仕方も大きく異なるべきものである。従って、慢性痛患者の心理的特徴の適切な理解と治療的アプローチの仕方については、未だにきちんと整理されているとは言い難い。

(2) 以上の様に、パーソナリティ特性の対局にあるべき上記の2つの心理的特徴—Alexと神経症傾向—の区別の重要性が指摘されていたにもかかわらず(Sifneos, 1973)、混乱が生じた背景には、Alex 研究に自記式心理質問紙 the 20-item Toronto Alexithymia Scale(TAS-20)がその簡便さのゆえに、世界中で臨床研究に広く用いられたことがある。実際、Alex 評価に用いられる TAS-20 では、結果として神経症傾向の強い群も得点が高くなりうる。このことから慢性痛患者に、実は Alex 群と神経症群の二つのグループが混在していた可能性が示唆される(Ueno, Maeda, & Komaki, 2014)。

近年の報告では、慢性痛患者では TAS-20 得点上昇に対し、抑うつや不安といった陰性情動がその交絡要因として影響しており、Alex が直接的に関与していない可能性が報告されている(Komaki, 2013; Saariaho, Saariaho, Mattila, Karukivi, & Joukamaa, 2013)。

(3) こうした TAS-20 を始めとする自己記入式質問紙法の限界を解消すべく我々は Beth Israel Hospital Psychosomatic Questionnaire 構造化面接法(m-SIBIQ)の開発を試み、報告してきた(有村達之、小牧元、他、心身医学 2002)。しかしながら、m-SIBIQ における 12 項目には、“夢に関する2項目”が含まれていたため、回答の信頼性に問題がある。そのためこの2項目を削除し、新たに 10 項目で構成される構造化面接法“10-item version m-SIBIQ”の信頼性・妥当性を検証することにより、Alex の正しい評価法を確立し、慢性痛を始めとする心身症の臨床に活用する必要がある。

他方、我々は健常人を対象に脳機能画像による Alex 傾向について研究してきた(Moriguchi & Komaki, 2013)。特に疼痛刺激画像提示に対する Alex の影響を、健常人を対象に fMRI で調べたところ、Cingulate Cortex(CC)や Anterior Insula(AI)などいわゆる Pain Matrix の活動性の変化が認められた(Moriguchi et al., Cerebral Cortex, 2007)。

(4) 従来、慢性痛患者では Pain Matrix を中心に痛覚過敏や異痛症などの中枢性機能的異常が報告され、構造的・機能的変化と重症度との関連が指摘されている。例えば線維筋痛症患者では VBM (voxel-based morphometry)を用いたメタ解析で前・後部帯状皮質、内側前頭前野、海馬傍回における灰白質の減少、あるいは小脳における増加(Lin C, et al, 2016, Shi H, et al.2018)が報告されている。しかしながら、同患者における心理的特徴との関係に関しては、不安や抑うつとの関係をもとに脳形態画像解析が行われているものの、Alex 傾向との関連に関しては、TAS-20 得点と Pain Matrix における変化の関連に一致した結論が得られていない(Noll-Hussong et al., 2013)。

2. 研究の目的

(1) 心身症患者の治療には情動的側面の理解が不可欠である。現在まで心理学的、神経学的研究により、抑うつや不安などの陰性感情、特に疼痛患者などにおける破局的思考 (Catastrophizing)、又、自己の感情の同定・表出困難である Alex が、その症状の形成・維持に密接に関わっている可能性が示唆されてきた。

しかしながら Alex 傾向の測定に TAS-20 など自記式質問紙が広く用いられたことにより、Alex 概念に混乱がもたらされ、特に神経症傾向などとの差異に問題が生ずることとなった(Ueno, Maeda, & Komaki, 2014)。

(2) そこで本研究の目的は、まず構造化面接による Alex 評価を確立すること、次に、慢性痛患者における脳画像を用いて Alex 傾向との関連を探り、神経症傾向など他の心理的特徴との差を検討することであった。

3. 研究の方法

(1) Alex 構造化面接法 (10-item version m-SIBIQ) の検証:

対象: 健常学生 93 名 (平均年齢 20.7 歳; 男 29 名、女 64 名)。方法: Alex 評価法には、既に関連した構造化面接法 m-SIBIQ (有村、小牧ら、心身医学 2002) の 12 項目から、夢に関する 2 項目を除いた、10 項目で構成される構造化面接法 10-item version m-SIBIQ を用いた。併用して他の面接法として TSIA (日本語版 Toronto Structured Interview for Alexithymia) (Bagby ら、2006)、またうつ病や不安障害など、精神障害の鑑別診断を行うための構造化面接法 MINI を実施した。一方、心理質問紙には TAS-20 (日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia Scale)、NEO Five Factor Inventory (5 因子性格特性を測定する検査)、IRI (Interpersonal Reactivity Index; 共感性を多角的に測定する尺度。認知的側面の「想像性」、 $\left[\right]$ 「視点取得」、情動的側面の「共感的配慮」、 $\left[\right]$ 「個人的苦痛」の 4 因子構造)、EES (Emotional Empathy Scale; 情動的共感性を測定する尺度。「感情的暖かさ」「感情的冷たさ」「感情的被影響性」の 3 因子構造)、BDI-II (Beck Depression Inventory) などを用いた。統計処理には分散分析を使用した。

(2) 慢性痛患者における脳機能画像に関する予備的研究: Alex 傾向との関連:

予備的研究ではあるが、線維筋痛症群 (n=25; 女性、平均年齢 39.9 歳) とコントロール群 (n=25; 女性、平均年齢 39.5 歳) に対して、2 群間の VBM (voxel-based morphometry) による脳形態比較を行った。また線維筋痛症群における脳携帯画像と Alex 傾向との関連について、TAS-20 スコアを用いて相関解析を行った (n=38、女性、年齢 44.47 ± 10.41)。VBM は SPM12 を用いて解析した。

4. 研究成果

(1) Alex 構造化面接法 (10-item version m-SIBIQ) の開発:

本 10-item version m-SIBIQ 法の信頼性については、internal consistency が 0.916 と高く、探索的因子分析により Alex 因子が唯一抽出されたことにより十分満足できるものであった。また、総スコアは TSIA 総スコアと統計的有意の正の相関を示し ($r=0.715$, $p=0.000^{***}$)、また TAS-20 の総得点と関連した ($r=0.259$, $p=0.012$)。

パーソナリティ傾向尺度 NEO-FFI において、開放性 Openess ($r=-0.323$, $p=0.002^{**}$) と有意に負の相関を示した。しかしながら神経症傾向 neuroticism ($r=0.151$, $p=0.149$) とは相関は認められなかった。一方、TAS-20 総得点は Neuroticism と強い正の相関を示した ($r=0.639$, $p=0.000$)。

情動的共感性を測定する尺度 EES スコアに関しては、感情的暖かさと有意に負の相関 ($r=-0.29$, $p=0.004$)、感情的冷たさと正の相関 ($r=0.351$, $p=0.001$) を示した。さらに IRI スコアにおいても同様に共感的配慮と想像性尺度において、それぞれ負の相関を認めた ($r=-0.289$ $p=0.005$; $r=-0.236$, $p=0.023$)。

一方抑うつ症状を示す BDI-II スコアとの相関は認められなかった ($r=0.098$, $p=0.350$)。一方、TAS-20 総得点とは強い正の相関を示した ($r=0.508$, $p=0.000$)。

以上の結果は、課題であった神経症傾向との鑑別においても、TAS-20 と異なり有効であることが示唆され、実際、臨床現場における Alex 傾向の強い患者の印象と合致する。

今回開発した構造化面接法“10-item version m-SIBIQ”は、Alex を適切に評価するための信頼できる有効な面接法と考えられた。

(2) 線維筋痛症群における脳機能画像: Alex 傾向との関連に関する予備的研究:

VBM による脳形態解析: 全脳解析においては、線維筋痛症群とコントロール群との間に灰白質量に有意差は見られなかった。

先行研究では、2群間比較で様々な領域が指摘されている (Kuchinad A, et al. 2007; Failon N, et al.2013; Ceko M, et al.2013) が、サンプルサイズの問題、あるいは線維筋痛症という疾患の多様性から、一定した結論は得られていない。

今回、Alex との関連では、線維筋痛症群での TAS-20 総得点ならびに下位項目との関連は全脳解析では認められなかったが、小脳を関心領域に設定したところ、TAS-20 の下位項目である EOT スコアと右小脳容積との正の相関が認められた ($p<0.05$)。

過去の研究では、TAS-20 総得点、DIF、DDF との関連部位の報告はなされている (Goelich KS, et al. Frontiers in Psychiatry, 9, 2018) が、EOT との関連は今回が最初である。

今後は、10-item version m-SIBIQ 構造化面接法による真の Alex 評価に基づいた、fMRI による安静時脳機能解析による、2群間比較ならびに相関解析を進めていきたい。

(3) まとめ:

Alex 構造化面接法 (10-item version m-SIBIQ) の妥当性・信頼性を検証し、その有用性を確認することが出来た。しかしながら、本研究では線維筋痛症患者の Alex 特徴についての検討が、予備的なものに止まった。今後は、同症患者を対象に、本構造化面接法による Alex 評価を確立した上で、脳画像を用いた神経学的クラスタリングを行い、Alex と神経症傾向などを区別できるかどうかの可能性を探っていく計画である。これにより、脳画像所見と心理、身体的特徴の差異に基づいた新たな治療的アプローチの開発が可能になると考えられる。

< 引用文献 >

- 1) Lumley MA, Smith JA, Longo David DJ. The Relationship of Alexithymia to Pain Severity and Impairment Among Patients With Chronic Myofascial Pain: Comparisons With Self-Efficacy, Catastrophizing, and Depression. Psychosom Res. 2002 Sep;53(3):823-30.
- 2) Tunks ER, Crook J, Weir R. Epidemiology of Chronic Pain With Psychological Comorbidity: Prevalence, Risk, Course, and Prognosis. Can J Psychiatry. 2008 Apr;53(4):224-34

- 3) Makino S, Jensen MP, Arimura T, Obata T, Anno K, Iwaki R, Kubo C, Sudo N, Hosoi M. Alexithymia and chronic pain: the role of negative affectivity. *Clin J Pain*. 2013 Apr;29(4):354-61.
- 4) Sifneos PE. The Prevalence of 'Alexithymic' Characteristics in Psychosomatic Patients. *Psychother Psychosom* 1973;22(2):255-62.
- 5) Ueno M, Maeda M, Komaki G. Different Subgroups of High-Scorers on the TAS-20 Based on the Big Five Personality Traits. *Personality and Individual Differences*. 2014; 68. 71-76
- 6) Komaki, G. Chapter 4 Alexithymia and Somatic Symptoms, in *Alexithymia and somatic symptoms*. Edit: Kyung Bong Koh, 2013; P.41-49
- 7) Saariaho AS, Saariaho TH, Mattila AK, Karukivi MR, Joukamaa MI. Alexithymia and Depression in a Chronic Pain Patient Sample. *Gen Hosp Psychiatry*. 2013;35(3):239-45.
- 8) 有村達之, 小牧 元, 村上修二, 玉川恵一, 西方宏昭, 河合啓介, 野崎剛弘, 瀧井正人, 久保千春.アレキシサイミア評価のための日本語改訂版 Beth Israel Hospital Psychosomatic Questionnaire 構造化面接法(SIBIQ)開発の試み. *心身医学* 2002. 42: 260-269
- 9) Moriguchi Y, Komaki G. Neuroimaging Studies of Alexithymia: Physical, Affective, and Social Perspectives. *Biopsychosoc Med*. 2013 Mar 28;7(1):8. doi: 10.1186/1751-0759-7-8.
- 10) Moriguchi Y, Maeda M, Igarashi T, Ishikawa T, Shoji M, Kubo C, Komaki G. Empathy and Judging Other's Pain: An fMRI Study of Alexithymia. *Cereb Cortex*. 2007, 17: 2223-34
- 11) Lin C, Lee S-H, Weng H-H. Gray Matter Atrophy within the Default Mode Network of Fibromyalgia: Meta-Analysis of Voxel-Based Morphometry Studies, *BioMed Res. Int.*, 2016 :7296125. doi: 10.1155/2016/7296125.
- 12) Shi H, Yuan C, Dai Z, Ma H, Sheng L. Gray matter abnormalities associated with fibromyalgia: A meta-analysis of voxel-based morphometric studies, *Semin Arthritis Rheum.*, 2016: 46(3), 330-337. 2016
- 13) Noll-Hussong M, Otti A, Wohlschlaeger AM, Zimmer C, Henningsen P, Lahmann C, Ronel J, Subic-Wrana C, Lane RD, Decety J, Guendel H. Neural Correlates of Deficits in Pain-Related Affective Meaning Construction in Patients With Chronic Pain Disorder. *Psychosom Med*. 2013 Feb;75(2):124-36.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 5件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Nishihara T, Nozaki T, Sawamoto R, Komaki G, Miyata N, Hosoi M, Sudo N	4. 巻 12
2. 論文標題 Effects of Weight Loss on Sweet Taste Preference and Palatability following Cognitive Behavioral Therapy for Women with Obesity.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Obes Facts	6. 最初と最後の頁 529-542
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1159/000502236	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 澤本良子、野崎 剛弘、西原智恵、小牧 元、須藤信行	4. 巻 25
2. 論文標題 双極性障害, むちゃ食い障害を伴う高度肥満症患者への認知行動療法の奏功例.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 肥満研究	6. 最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小山憲一郎、荒木久澄、小牧 元、野崎剛弘	4. 巻 28
2. 論文標題 マインドフルネス食観トレーニング: Mindfulness-Based Eating Awareness Training (MB-EAT) に関する基礎研究 チョコレートエクササイズのマインドフルネス音声教示はチョコレートの摂取量を減らしうるか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福岡県立大学人間社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 細井昌子	4. 巻 77
2. 論文標題 慢性疼痛に対する心理的アプローチ--嫌悪的現象との付き合い方を習得するレッスン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医学と薬学	6. 最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中佑、安野広三、細井昌子	4. 巻 97
2. 論文標題 慢性疼痛に対する心理的アプローチ : Bio-psycho-social modelから	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床と研究	6. 最初と最後の頁 73-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 細井昌子、伊津野巧、茂貫尚子、末松孝文、安野広三	4. 巻 20
2. 論文標題 「こころ」の痛みと「からだ」の痛み-慢性疼痛臨床における心身相関	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 150-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小山憲一郎、荒木久澄、小牧 元、野崎剛弘	4. 巻 28
2. 論文標題 マインドフルネス食観トレーニング : Mindfulness-Based Eating Awareness Training (MB-EAT) に関する基礎研究 チョコレートエクササイズのマインドフルネス音声教示はチョコレートの摂取量を減らさるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡県立大学人間社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Komaki G	4. 巻 12:10
2. 論文標題 A new milestone for BioPsychoSocial Medicine	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Biopsychosoc Med	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi: 10.1186/s13030-017-0099-3.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kodama N, Moriguchi Y, Takeda A, Maeda M, Ando T, Kikuchi H, Gondo M, Adachi H, Komaki G	4. 巻 12:15
2. 論文標題 Neural correlates of body comparison and weight estimation in weight-recovered anorexia nervosa: a functional magnetic resonance imaging study.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Biopsychosoc Med	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi: 10.1186/s13030-018-0134-z. eCollection 2018.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小牧 元	4. 巻 33(12)
2. 論文標題 特集 摂食障害の今日的理解と治療II	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 1385-1392
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野崎剛弘、小牧 元、須藤信行	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 特集：もっと知りたいあなたのための認知行動療法ガイド。生活習慣病とCBT	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 60-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mitsui T, Yoshida T, Komaki G	4. 巻 11
2. 論文標題 Psychometric properties of the eating disorder examination-questionnaire in Japanese adolescents.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Biopsychosoc Med	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13030-017-0094-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Sawamoto R, Nozaki T, Nishihara T, Furukawa T, Hata T, Komaki G, Sudo N	4. 巻 11
2. 論文標題 Predictors of successful long-term weight loss maintenance: a two-year follow-up.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Biopsychosoc Med	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13030-017-0099-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計32件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Komaki G
2. 発表標題 Developing a structured interview for alexithymia, the 10-item version of the modified Beth Israel Hospital Psychosomatic Questionnaire.
3. 学会等名 International Conference on Emotions, well-being, and health. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nozaki T, Sawamoto R, Nishihara T, Komaki G, Sudo N.
2. 発表標題 Are cognitive behavioral strategies to increase adherence to exercise effective for long-term weight loss maintenance by women with overweight and obesity? A randomized controlled trial.
3. 学会等名 25th World Congress of the International College of Psychosomatic Medicine (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西村大樹, 前田基成, 小牧 元.
2. 発表標題 女子中学生の食行動異常発症の危険性を予測する因子を同定するためのコホート研究.
3. 学会等名 第2回日本心身医学会関連学会合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木久澄、小山憲一郎、野崎剛弘、小牧 元、須藤信行.
2. 発表標題 マインドフルネス食観トレーニング(MB-EAT)を用いた集団肥満治療.
3. 学会等名 第2回日本心身医学会関連学会合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 馬場天信
2. 発表標題 愛着スタイル、アレキシサイミアが傷つき体験の自己開示抵抗感および精神的健康に及ぼす影響
3. 学会等名 第2回日本心身医学会関連学会合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 馬場天信、寺田絢
2. 発表標題 アレキシサイミアの傷つき体験の語りにくさに関する研究
3. 学会等名 第38回日本心理臨床学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安野広三、細井昌子、田中佑、早木千絵、西原智恵、柴田舞欧1、岩城理恵、須藤信行
2. 発表標題 慢性疼痛に対する心療内科外来治療への失感情症の影響：線維筋痛症とその他の慢性疼痛の比較
3. 学会等名 第2回日本心身医学会関連学会合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細井昌子、柴田舞欧、安野広三
2. 発表標題 慢性疼痛の治療対象としての情動調整障害：アレキシサイミア
3. 学会等名 第41回日本生物学的精神医学会（シンポジウム）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野崎剛弘、西原智恵、荒木久澄、小牧 元、須藤信行.
2. 発表標題 ストレス対処法～認知行動療法とマインドフルネス～.
3. 学会等名 第27回西日本肥満研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山憲一郎、荒木久澄、小牧 元、野崎剛弘
2. 発表標題 肥満症治療のためのマインドフルネス Mindfulness Based Eating Awareness Trning (MB-EAT)
3. 学会等名 第40回日本肥満学会、第37回日本肥満症治療学会合同学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木久澄、小山憲一郎、野崎 剛弘、小牧 元、須藤 信行.
2. 発表標題 新たな肥満治療戦略、マインドフルネス食観トレーニングMindfulness-Based Eating Awareness Training (MB-EAT).
3. 学会等名 第6回日本マインドフルネス学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野崎剛弘、西原智恵、澤本良子、古川智一、波多伴和、高倉 修、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 身体活動習慣のアドヒアランス強化に焦点を当てた認知行動療法の長期体重維持効果～無作為化比較試験～
3. 学会等名 第35回日本肥満症治療学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Komaki G
2. 発表標題 Developing a structured interview for alexithymia, the 10-item version of the modified Beth Israel Hospital Psychosomatic Questionnaire.
3. 学会等名 7th International Conference on Emotions, Well-Being, and Health. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野崎剛弘、西原智恵、荒木久澄、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 ストレス対処法～認知行動療法とマインドフルネス～.
3. 学会等名 第27回西日本肥満研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山憲一郎、荒木久澄、小牧 元、野崎剛弘
2. 発表標題 肥満症治療のためのマインドフルネス Mindfulness Based Eating Awareness Training (MB-EAT)
3. 学会等名 第40回日本肥満学会、第37回日本肥満症治療学会合同学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木久澄、小山憲一郎、野崎剛弘、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 新たな肥満治療戦略、マインドフルネス食観トレーニングMindfulness-Based Eating Awareness Training (MB-EAT)
3. 学会等名 第6回日本マインドフルネス学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒木久澄、小山憲一郎、野崎剛弘、小牧 元、須藤信行.
2. 発表標題 マインドフルネス食観トレーニング(MB-EAT)を用いた集団肥満治療
3. 学会等名 第2回日本心身医学会関連学会合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安野広三、細井昌子、田中佑、早木千絵、西原智恵、柴田舞欧、岩城理恵、須藤信行
2. 発表標題 慢性疼痛に対する心療内科外来治療への失感情症の影響：線維筋痛症とその他の慢性疼痛の比較
3. 学会等名 第2回日本心身医学会関連学会合同集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細井昌子
2. 発表標題 慢性疼痛における心身相関：薬物療法を阻害するメカニズムの解明
3. 学会等名 第41回日本疼痛学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 細井昌子、柴田舞欧、安野広三
2. 発表標題 慢性疼痛の治療対象としての情動調整障害：アレキシサイミア
3. 学会等名 第41回日本生物学的精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 義田俊之、安野広三、河田 浩、早木千絵、岩城理恵、西原智恵、柴田舞欧、須藤信行、細井昌子
2. 発表標題 慢性疼痛患者における感情同定困難と抑うつに関連の背景を探る：思考コントロール方略の影響
3. 学会等名 第49回日本慢性疼痛学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Gen Komaki, Yoshinobu Baba, Toshiyuki Yoshida, Motoharu Gondo, Tatsuyuki Arimura, Yoshiya Moriguchi, Motonari Maeda
2. 発表標題 Preliminary study to develop a structured interview for alexithymia, the 10-question version of the modified Beth Israel Hospital Psychosomatic Questionnaire (m-SIBIQ).
3. 学会等名 The 18th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nozaki T, Sawamoto R, Nishihara T, Hata T, Takakura S, Komaki G, Sudo N.
2. 発表標題 The effectiveness of cognitive behavioral strategies to increase adherence to exercise on long-term weight loss maintenance by women with overweight or obesity: A randomized controlled trial.
3. 学会等名 25nd European Congress on Obesity. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小牧 元、馬場天信、義田俊之、権藤元治、有村達之、守口義也、前田基成
2. 発表標題 質問紙TAS-20で“アレキシサイミア”は正しく評価可能か？ 構造化面接法10-item m-SIBIQの開発の試み
3. 学会等名 第58回日本心身医学会九州地方会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小牧 元、東條光彦、前田基成
2. 発表標題 女子中学生における摂食障害とインターネット依存との関連：大規模地域調査
3. 学会等名 第59回日本心身医学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤本良子、野崎剛弘、西原智恵、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 治療に難渋した高度肥満症例の成功例と不成功例～心身両面からの検討～（パネルディスカッション）
3. 学会等名 第36回日本肥満症治療学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西原智恵、野崎剛弘、伊津野巧、澤本良子、波多伴和、高倉修、小牧元、細井昌子、須藤信行
2. 発表標題 注意欠如・多動性障害（ADHD）を伴う高度肥満症に対し認知行動療法が有効だった一例
3. 学会等名 第36回日本肥満症治療学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野崎剛弘、西原智恵、 澤本良子、 波多伴和、高倉 修、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 発達障害を伴う肥満症患者に対し認知行動療法を実施し良好な減量効果を得た3症例の検討.
3. 学会等名 第60回日本心身医学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野崎剛弘、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 肥満治療における認知行動療法の進歩（合同シンポジウム3）
3. 学会等名 第39回日本肥満学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤本良子、野崎剛弘、西原智恵、 波多伴和、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 身体活動習慣のアドヒアランス強化に焦点を当てた認知行動療法の長期リバウンド防止効果
3. 学会等名 第39回日本肥満学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西原智恵、野崎剛弘、澤本良子、荒木久澄、朝野泰成、波多伴和、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 女性肥満患者における、アクチグラフを用いた客観的睡眠指標と甘味覚の関連
3. 学会等名 第39回日本肥満学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西原智恵、野崎剛弘、荒木久澄、小牧 元、須藤信行
2. 発表標題 家族介護の中で疾病否認をきたした2型糖尿病に対し、認知行動療法が心身両面に有効であった一例
3. 学会等名 第58回日本心身医学会九州地方会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 野崎剛弘、小牧 元.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 10
3. 書名 日常臨床場面における行動医学の実践. 肥満症.	

1. 著者名 小牧 元、田中喜秀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ニュートンプレス	5. 総ページ数 6
3. 書名 ストレス ストレスはなぜ体に悪い？	

1. 著者名 馬場天信	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本生理心理学会	5. 総ページ数 7
3. 書名 第15章 アレキシサイミア 片山純一・鈴木直人(編) 第 巻 応用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	馬場 天信 (Baba Amanobu) (00388216)	追手門学院大学・心理学部・教授 (34415)	
研究分担者	細井 昌子 (Hosoi Masako) (80380400)	九州大学・大学病院・講師 (17102)	